

## 1. 本発表の目的

認知言語学は、生成文法に対立するかたちで成立したいくつかの枠組みが緩やかに重なり合った研究プログラムであり、言語知識を自律的なモジュールではなく、一般的な認知能力の反映と見なす点にその特色がある。現在では反生成文法的な傾向はそれほど明確ではなく、独自の研究領域を開拓したと言える状況にあるとはいえ (Taylor 2007, Langacker 2011)、その成り立ちを反映して、理論にとって根本的な部分の多くで、生成文法とは異なる立場をとっている。

西山 (2019a) は、生成文法は自然科学的であり、認知言語学は自然科学的ではないという整理を行っている。これは（議論の細部を除けば）正しいように思われる。たとえば、認知言語学者である西村は「自戒の念も込めて言うと、認知言語学的な研究の多くは「言語のメカニズムを解明する科学」ではないと考えています」（西村・野矢 2013: 200）と述べている。本発表では、非（自然）科学としての認知言語学という営みの可能性を検討する<sup>1</sup>。

## 2. 自然科学と認知言語学

認知言語学が自然科学的であるかどうかを判断するためには、自然科学がどのようなものかが明らかになっている必要がある。とはいえ、自然科学に十分な規定を与えることは本発表の射程を超える課題である。さしあたってここでは、Chomsky (2000) に見られる「方法論的自然主義」ならびに、そこからの要請である生成文法的な研究態度を採用することが自然科学であるための条件と考える。この点について、西山 (2019b: 6) は「言語表現の意味を、人間の心的器官に内在する意味特性として自然主義的に分析し説明しようとする科学的研究のアプローチと、その表現を人間が用いるときの世界における対象を念頭において表現の意味を捉えようとする *common sense concepts* によるアプローチとは本質的に異なる。後者には、言語使用者の人間の関心、目的、意志などが深くかかわり、方法論的自然主義が適用できない」と述べている。認知言語学では、言語知識の単位は全て、具体的な使用事象から抽象化を通じて形成されるとする、使用基盤モデル (Langacker 2000) を採用している。使用事象に参加するのは、話し手・聞き手という概念化の主体であり、そこでは、〈机〉や〈本〉といった *common sense concepts* が用いられている。この点だけを取ってみても、認知言語学が（少なくとも生成文法と同じようには）自然科学でないことは明らかであろう。

とはいえ、認知言語学においても、「言語は究極的には脳の神経活動に見いだされるべきものである」（Langacker 2000: 6）といった種類の主張がなされることがある。脳は物理的対象であるから、（その物理的側面は）自然科学的な手法で研究することが可能である。しかし、このような語りは、認知言語学が自然科学であることを意味するものとしてではなく、あくまで一種の比喻として理解するべきである<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> もちろん、認知言語学的な伝統に属する研究の全てが非（自然）科学的であるわけではない。また、それ自体として（自然）科学的であるかどうかとは独立に、（自然）科学の研究成果を重視する程度についても様々な立場がありうる。この点について、本多 (2019: 218) は「認知意味論の立場をとることは、心理学と [ママ] はじめとする認知諸科学と言語学の双方向の共同により、ヒトの認知のありようを明らかにする道を開く」と述べている。

<sup>2</sup> Langacker (2010: 120) は、認知の働き (cognition) を脳に帰す語りは中心で全体を表すメトニミーとして理解するべきだと述べている。

言語の主体はあくまでも人間であり、神経活動が果たす機能に内実を与えるのは、私（たち）の経験である<sup>3</sup>。私（たち）の言語使用に脳が重要な役割を果たしていることは疑いえない。しかしそれは、身体を通じてなされる言語という活動の主要な一部であるということの意味するにすぎず、脳自体が言語の主体ではありえないのである。

### 3. 解釈言語学

当然のことながら、自然科学でないことは科学でないことを含意しない。認知言語学は何らかの意味で科学的な営みでありうるのだろうか。大堀 (2017) は認知言語学の研究対象として、人間にとっての真理を追求する「解釈言語学」を認めるべきだと主張している。言語表現の意味が、概念化の主体の捉え方によって特徴づけられるのであれば、意味にかんする議論は、私（たち）が有する概念にかんする議論であり、そして（人間にとっての）世界にかんする議論でもあることになる。本節では、人間・言語・世界の間で成立する関係を探求する学問としての「解釈言語学」の実践として、不在因果やコミュニケーションが、どのように捉えられているかを検討する。

#### 3.1. 不在因果と容認性

「不作為（実行されなかった行為）や否定的出来事（生起しなかった出来事）を、原因（或いは結果）とする因果関係」（伊佐敷 2010: 1）は不在因果と呼ばれる。たとえば、（1）は「その花が一人住まいの太郎の部屋のベランダにある場合のように、太郎の水やりが当然期待される場合」（伊佐敷 2010: 2）に用いられるとされる。因果関係が反事実的依存関係によってのみ規定されるのであれば、誰が水をやっていたとしても結果として花は枯れなかったと考えられることから、（2）も同様に自然になるはずだが、実際には不自然な文となっている。ここから、不在因果には「期待可能性」（伊佐敷 2010: 7f.）の高さが関与していると思えることができる。すなわち、太郎が花に水をあげることは高い「期待可能性」を持つのに対し、エリザベス女王が花に水をあげることは高い「期待可能性」を持たないということである。

- (1) 太郎があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ。 (伊佐敷 2010: 2)  
(2) ??エリザベス女王があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ。

(1) が表す事態は、(3) のように出来事ではなく太郎を主語の指示対象とした他動詞構文によっても表すことができる。また、(4) が不自然であるのも (2) と同様の理由によるものと考えられる。西村 (1998: 164f.) は (5) ~ (7) などを例として挙げ、不在因果の事例で他動詞構文が用いられるのは「含意される（または不定詞句の表す）事態 Z の生起の直接の原因は、W（主語）が Z の生起を阻止すべく行為 X' を遂行する（たとえば自己の感情をコントロールする）ことができる立場にあるのにそれを遂行しないことである」、 「W は Z に対する〈責任〉の主体である」ためであると説明している。

<sup>3</sup> 脳状態と私（たち）の現象学的経験が食い違う場合、優先されるのは経験であって脳状態ではないだろう。「あなたの脳は痛みを感じる状態にないのだから、あなたがどれだけ痛みを感じていたとしても、その痛みは気のせいである」という主張が理解し難いと同様に、「あなたの脳は『犬が走っている』を概念化している状態にないのだから、あなたがどれだけ『犬が走っている』と概念化したと（感じていると）しても、その概念化は気のせいである」という主張は無理のあるものと思われる。

- (3) 太郎はあの花を枯らした。
- (4) ??エリザベス女王があの花を枯らした。
- (5) George dropped the dish (accidentally/ inadvertently).
- (6) 靖は (うっかり/思わず) 皿を落とした/落としてしまった。
- (7) She did not allow herself to be too upset by the news.

ここまでの観察から、「期待可能性」と〈責任〉は常に共起するように思われるかもしれない。しかしながら、両者にずれが見られる例が存在する。たとえば、花子が「太郎が白いシャツを着なかったら自殺をしよう」と決意しており、太郎が白いシャツを着ることがなく、花子が自殺したという事態を(8)によって表すことは自然だろう。太郎が白いシャツを着ることは十分な「期待可能性」を持つため原因事象と見なしうるのである。一方で、同じ状況で(9)を用いることは不自然だろう。花子が自殺する条件を事前に耳にしているのでもなければ、太郎は花子の死について〈責任〉の負いようがないのである。

- (8) 太郎が白いシャツを着なかったことが、花子が死んだ原因だ。
- (9) ??太郎は花子を死なせてしまった。

また、太郎が朝、息子を家から送り出し、息子が交通事故にあって死んでしまったという事態を(10)によって表すことは不自然だろう。これは、太郎が息子の外出を防ぐ可能性を考慮することは困難であり、「期待可能性」が低いためだと考えられる。つまり、原因事象の「期待可能性」が低いため、因果関係が成立しえず、それゆえ不在因果として捉えることが困難なのである<sup>4</sup>。一方で、同様の事態を(11)によって表すことは自然である。これは、太郎が息子の死に〈責任〉を負っていると見なせるためである。

- (10) ??太郎が息子の外出を防がなかったことが、息子が死んだ原因だ。
- (11) 太郎は交通事故で息子を死なせてしまった。

文(を含む発話)の容認性を利用して、「期待可能性」と〈責任〉が独立であることを示す以上の議論に対して、「分析に用いられる概念が明示的ではない」・「言語の分析になっていない」という批判が想定しうる<sup>5</sup>。この2つの批判はどちらも、概念と言語の意味は異なるという信念に基づくものだと考えられる。百科事典的意味観を採用する認知言語学の立場からは、この信念は正当性しえないものである。私(たち)は「期待可能性」や〈責任〉などの概念について、日常的な理解を有しており、それをもとに言語を分析することを通じて概念の理解を深めることができる。分析に用いる概念は、まさに言語の意味(の一部)であり、説明項と被説明項の関係にはなっていないのである。それでもこのような議論が

<sup>4</sup> この事例には、太郎が息子の外出を防ぐ(すなわち、息子を送り出さない)ことも十分にあり得るために「期待可能性」は高いという解釈もありうる。その場合であっても、やはり(10)が不自然なのは、原因事象(の候補)と結果事象(の候補)の関係が、(より直接的な原因事象を容易に想定できるという意味で)間接的であるために、そもそも因果関係の事例とは見なしづらいためである。

<sup>5</sup> 山泉(2019)が研究を評価する枠組みとして紹介している田窪(1998)においても、概念の明示性が重視されている。

空転せずに済むのは、概念は環境によって様々に見えを変化させるものであり、それぞれの見えおよび見え同士の関係を把握することが理解の助けとなるからである。

### 3.2. コミュニケーションとあや性

(12) はカテゴリー名を個体に適用する提喩であり、あや性を持つ。それに対して (13) は通常表現であり、あや性を持たない。ここで重要なのは、あや性は分析者によってはじめて見いだされるものではなく、言語の使用者が感じることもできるものだということである<sup>6</sup>。あや性はごく大まかに言えば、「特別な言い方をしている感じ」として直感されるだろう。このような感覚の存在は、言語を用いたコミュニケーションのあり方を探求するための手がかりとなる。

(12) [人間として概念化できる対象を指して] 生物が動いている。 (田中 2019: 408)

(13) [生物ではあるがその下位カテゴリーでは概念化できない対象を指して] 生物が動いている。

(田中 2019: 409)

もし、言語コミュニケーションが、話し手の行っている概念化を言語的にコード化し、聞き手がそれを解読するという過程に尽きるのであれば、聞き手が行うのは、(12) であれ (13) であれ、話し手の身振りによる指示と、「生物」という語を介した指示が同一の対象に結びついていること、そしてそれが「生物が動いている」という形式と結びついた概念が表す状態にあることを推論によって導くのみであることになる。ここにはあや性の生じる余地がないだろう。聞き手が読み解いた話し手の概念化は、何であれそれ自体として受け取られ、他の概念化と比較されることはありえないからである。

私 (たち) は、現実にあや性を感じることもある。これは、上記の想定には不備があることを示している。あや性が「特別な言い方をしている感じ」として直感されるという内省が正しいものであるならば、ここに必要なのは、対象の概念化と言語化の二重性である。(12) を例に説明すると次のようになる。話し手は、対象を〈人間〉として捉え、(実際には〈人間〉として (も) 捉えていると気づかれることを見越した上で) 〈生物〉として捉えているかのように聞き手に提示する。この際に用いられる言語記号は「生物」であるために、聞き手は「生物」と慣習的に結びついた概念、すなわち〈生物〉によって対象を概念化 (カテゴリー化) する。しかし、同時に対象を〈人間〉としても概念化しており、そして、話し手もそのように (も) 概念化しているであろうことが容易に推論できる。そこから、実際に発話された「生物が動いている」があえて選択された表現であることが把握され、あや性を感じるのである<sup>7</sup>。

(13) があや性を持たないという事実も同じように説明できる。ここでは、話し手も聞き手も〈生物〉として概念化するに相応しい対象を概念化し、それを「生物」という記号を手がかりに指示しているために、(12) に見られる差異が生じないのである。

隠喩についても同様の分析が可能であるが、隠喩の使用によってはじめて生み出される概念化が含まれているために、事情はより複雑なものとなる。野矢 (2011: 434) は (14) を例として挙げ、「山が笑う」という隠喩は、その既存の意味を利用して新しい意味を作り出す。より正確に言えば、それを使用した発話の状況とその発話が担っている既存の意味とを利用して、その場で新しい意味を作り出すので

<sup>6</sup> 山泉 (2005: 295) は、あや性の度合いが高い表現について「異様に感じられる」とコメントしている。

<sup>7</sup> ここにはさらに、〈人間〉である対象を表すための、より慣習的な言語表現が存在するという知識も利用されていると考えられる。

ある」と説明している。話し手が用いた言語表現「山が笑っている」と慣習的に結びついた概念が存在しないため<sup>8</sup>、聞き手は、「山が笑っている」という表現を手がかりに喚起しうる概念化（〈山が笑っている<sub>1</sub>〉）と、話し手が行っているであろう概念化（〈山が笑っている<sub>2</sub>〉）の両者を、〈山が笑っている<sub>1</sub>〉から〈山が笑っている<sub>2</sub>〉へのアクセスが自然なものとなるように調整しなければならない。ここからあや性が生じるのである。このような調整は、目立たない形ではあるが、提喩である（12）にも生じている。ある人を〈人間〉として捉えつつ〈生物〉としても捉えることは、その人の〈生物〉としての側面をより際立たせることになる。

(14) 山が笑っている。

(野矢 2011: 421)

ある表現があや性を持つかどうかは、(アイロニーなど、手がかりを提示することが慣習化しているものを除けば) 上述の仕方でのコミュニケーションを行うことによってはじめて分かることである。私(たち)が感じるあや性は、「期待可能性」や〈責任〉と同じく、明確に規定されているわけではないが、それでもコミュニケーションのあり方への示唆を与えるものであることは確かである。

#### 4. 理論基盤記述と理論構築

山泉 (2019) は認知言語学 (や生成文法など) の「何らかの枠組みを使って具体的な現象を分析し、上手く分析できたという結果を報告するだけの発表」(山泉 2019: 44) を理論基盤記述による分析成功報告と呼び、「自分の支持する枠組みの確からしさを気持ちの上でしか高めることがなく、理論的にはなんらの貢献もないということになる」(山泉 2019: 46f.) と評価している。この判断の背後には、理論的枠組みは、それを使用する以前と以降で変化しないという信念があるだろう。しかしながら、理論研究もまた人間の営みである以上は、理論に対する理解の進展を、理論そのものの進展から排除することは望ましくなく、また、不自然でもある<sup>9</sup>。本節では、「参照点能力」(Langacker 1993) を例に、理論基盤記述が同時に理論構築でもあることを示す。

参照点能力とは、より心的にアクセスしやすい対象 (参照点) を経由して、ある対象 (ターゲット) にアクセスする能力である。この能力はたとえば、所有権関係・親族関係・全体部分関係・主題と節の関係を概念化する際に用いられると考えられている<sup>10</sup>。仮に、参照点能力が分析対象を伴わず単独で提示されていたとしたら、私(たち)の理解は極めて貧しいものに留まっていただろう。ここには、具体的な関係に見いだされることによって、参照点能力への理解が深まり、またそれによって、具体的な諸関係の理解が深まるという循環が成立している。

人間の思考は一般に、抽象的な規則ではなく、類似性による類推に基づくものであるとされる (鈴木

<sup>8</sup> 全ての隠喩が、言語表現と慣習的に結びついた意味を持たないわけではない。その場合でも、当該事象の概念化には不適当であれば同じように説明することができる。

<sup>9</sup> 研究者が研究対象と向き合う際の態度は、理論によって決定づけられるように思われる。どのような理論であっても、その真価は、実践によって見いだされるものであろう。

<sup>10</sup> たとえば、多くの状況で、*the dog's tail* が自然であるのに対し、*the tail's dog* が不自然であること (Langacker 1993: 8)、一方で、道に犬のしっぽが落ちているのを見つけた場合に *Where is the tail's dog?* (Langacker 1993: 9) と問うことは自然であることが参照点能力によって説明される。一般に、全体である犬を経由して部分である尻尾にアクセスすることは、その逆よりも遥かに自然である。一方で、道端に尻尾のみが落ちている場合など、使用事象において独立に捉えられているのであれば、そのような経路でのアクセスも十分にあり得る。

2020) <sup>11</sup>。理論基盤記述は、理論的枠組が当てはまる（ことが明らかな）対象を増やしていく行為だと言える。理論的枠組は具体的な適用対象を通じてより良く知られるのであり、この点で理論構築への貢献は少なくない。理論を発展させるのは、反例の発見による修正（あるいは放棄）だけではないのである。

## 5. 哲学的言語学

佐藤 (2000: 38) は「哲学は究極的には個体としての精神の営みであって、科学のような集団的知識の体系とは根本的に性格を異にする」と述べる。科学的研究を行うさい、私（たち）は何をしているのだろうか。実際に論文や研究発表の形で公開されるのは、活動のごく一部に過ぎない。研究者自身の主体的経験はけっして公共的には語り得ない<sup>12</sup>。これは、山頂からの眺めを得るには、山頂に立つしかないのであって、眺めにかんする記述をどれだけ集めたところで足りないのと類比的である。

私（たち）は、世界を様々に概念化し（あるいは概念化のうちに）生きている。そのため、意味（すなわち、概念化）を明確に捉えようとする営みは、必然的に「個としての精神が世界を明らかにしようとする努力」（佐藤 2000: 70）としての側面を持つ。このような努力は、自然科学はもちろん、解釈的言語学においても位置づけられないものである。哲学的言語学は、言語使用者としての実践を内側から捉える試みであり、使用基盤的な言語観の不可欠な一部を成すものと考えられる。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (2000) *New horizons in the study of language and mind*. Cambridge University Press. / 本多啓 (2018) 「認知言語学はヒトの認知について何かを明らかにしたのだろうか？」高橋英光ほか（編）『認知言語学とは何か？』201-220. くろしお出版 / 伊佐敷隆弘 (2010) 「不在因果について」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』23: 1-15. / Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38. / Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1-63. CSLI Publications. / Langacker, Ronald W. (2010) How not to disagree: The emergence of structure from usage. Kasper Boye and Elisabeth Engberg-Pedersen (eds.), *Language usage and language structure*, 107-143. De Gruyter Mouton. / Langacker, Ronald W. (2011) Convergence in cognitive linguistics. Mario Brdar, Stefan Th. Gries, and Milena Žic Fuchs (eds.), *Cognitive linguistics: convergence and expansion*, 9-16. John Benjamins. / 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹（著）『構文と事象構造』107-203. 研究社 / 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室』中央公論新社. / 西山佑司 (2019a) 「認知言語学と関連性理論」森雄一ほか（編）『認知言語学を拓く』145-170. くろしお出版. / 西山佑司 (2019b) 「意味論における内在主義と外在主義」慶應言語学コロキウム 2019年1月12日・13日配布資料. / 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』講談社. / 大堀壽夫 (2017) 「認知言語学の課題」西山佑司・杉岡洋子（編）『ことばの科学』152-173. 開拓社. / 佐藤徹郎 (2000) 『科学から哲学へ』春秋社. / 鈴木宏昭 (2020) 『類似と思考 改訂版』ちくま書房. / 田窪行則 (1998) 「文法（理論・現代）」『国語学』193: 31-38. / 田中太一 (2019) 「提喻とカテゴリー化」『日本言語学会 159 回大会予稿集』408-413. / Taylor, John R. (2007) Cognitive linguistics and autonomous linguistics. Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.), *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 566-588. Oxford University Press. / 山泉実 (2005) 「シネクドキの認知意味論へ向けて」山梨正明ほか（編）『認知言語学論考 No.4』271-312. ひつじ書房. / 山泉実 (2019) 「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』29: 44-72.

<sup>11</sup> 使用基盤モデル (Langacker 2000) において、具体性の高い知識のほうがカテゴリー化において優位であることもこのことの現れの一つだと考えられる。

<sup>12</sup> もちろん、普通の意味での研究成果であっても、実際に全て公開することは労力の点で現実的ではない。